

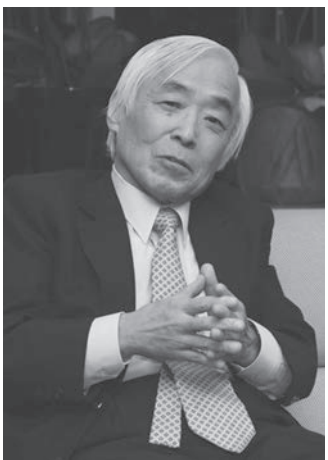
## 植樹会通信

### ◆国立キャンパスの今昔Ⅰ

——世界に誇るキャンパスとその変貌—— 石弘光(36経)

私が学生の頃 1957年4月、私は憧れの一橋大学へ入学した。入学式の日、改めて校門をくぐりロマネスク式の壮大なキャンパスを見た時、これが自分の通う大学だと喜びがふつふつと湧いてきたのを今更に思い出す。爾来、2004年11月に大学を退職するまでほぼ半世紀間、国立キャンパスに通い続けることになった。

私の学生時代のキャンパスはいまのように人々が行きかうこともなく、武蔵野の緑に包まれ実に静寂な空間であった。尾長鳥など歩いていると耳を掠めて飛び交い、まさに野鳥の住処でもあった。学生数が1学年40人と少ない上、1、2年生は小平分校に居たので、3、4年生と数十人程度の大学院生そして教職員のみがキャンパスの住民であった。



ペイン風の校舎と相まって緑豊かなキャンパスに目を奪われたものだ。同じような好印象をプリンストン大学、中国の武漢大で感じた。

わが一橋大学のキャンパスは、当然後者のタイプに入る。武蔵野の面影を残した雑木林に囲まれ、正門を入ると時計台と池がミックスした風景は、まさにこれまで紹介した主要大学の例と遜色がなく世界に誇るべきものがある。

キャンパスの変貌 ところが国立キャンパスにとってこの良好な自然環境は、時代と共に残念ながら次第に失われざるをえなくなった。国立町自体、人口が急増し10万人規模にまで膨れ上がり、1967年に市制がひかれることになった。キャンパスは街の人たちの憩いの場となり、人の出入りも激しくなってきた。そして学生数も次第に増え一学年1000人規模にまで、膨れ上がってきた。更には、1996年にはキャンパス統合が実現し、1、2年生が小平から国立地区へと移ってきた。

大学内外の要因で国立キャンパスには絶えず大勢の人が行きかうようになり、留学生の数も増え国際色豊かな空間となってきた。この頃になると人の群がる池の周辺、そして生協の付近など、ごみが見苦しいほどに散らばりだした。その他、講堂、図書館、講義棟のあたりどこへ行っても、道端にはごみが目についた。ごみはごみを呼ぶ状態で、ごみの大半はやはりその周りにたむろしている人たちの心無い仕業と思われた。かくして

町の人たちも入構を禁じられてはいなかったが、時計台が辺りを睥睨するかのような学問の府に敬意を表したせいか余り訪ねて来ず、人影もない静かな佇まいであった。したがって地面にごみが散乱することもなく、キャンパスはいつも清潔で美しい状態が保たれていた。当時、国立自体がまだ市でなく人口も少なく、大学通りの両側には普通の住宅が立ち並んでいた田舎町であった。町自体が都会の喧騒と離れ、文字通り静かな大学街で国立と云えば一橋のある大学街と広く世間で知られ、両者が一体となった存在であった。

世界有数な美しいキャンパス 私は、これまで世界の主要な大学のキャンパスを数多く訪れる機会に恵まれてきた。一般に欧米では、街並みと大学の校舎が混然一体化し、その街全体が大学の構内となっているケースが多い。イギリスにおいてはケンブリッジ大、オックスフォード大が、この例である。あるいはアメリカでいえばエール大、シカゴ大、ドイツのボン大、イタリアのボッコニ大がこのタイプに入るだろう。この場合、大学キャンパスといったイメージは希薄となる。

これに対し、大学に校門があり塀や柵などで敷地が仕切られる場合、圧倒的にこのタイプに入る。このタイプの中で、最も強烈な印象を与えられたのはスタンフォード大学である。カリフォルニアの燦爛と輝く太陽の下で、まさに花咲き鳥が鳴きス

世界に冠たる国立キャンパスをどう維持したらよいのか、心の中でいつも気にかかる問題となってきた。

(2017年12月記)

### ◆国立キャンパスの今昔Ⅱ

——植樹から環境保全へ—— 石弘光(36経・38修経)

笛吹けど踊らず 国立キャンパスのごみの散乱、それに伴う汚れは、構内の美化のために大問題となってきた。1998年12月に私は、学長に就任した。学長になって一番嬉しかったことは、これで組織のトップとして世界に誇るこのキャンパスを復元するのにリーダーシップをとれるだろうということであった。私は学長に就任する前から、ゼミの終わった後でゼミテンを動員して生協や池の周辺など目につく場所でごみ拾いをすることもあった。この試みはゼミ生からも不評で歓迎されることが分かり、諦めざるを得なかった。講義の後に、出席者にごみ拾いを呼び掛けても不発に終わることが多かった。

学長になってすぐに私は、大学の広報誌『国立学報』(1999年2月号)に「キャンパスは大学の顔」を寄稿した。これまでの経験から、キャンパスはまさに大学の顔であり、散乱するごみは自分の顔に泥を塗るようなものだ。いくら研究・教育面で名声を挙げて、素晴らしい大学だと人前で胸を張って誇れない、という自論を展開した。



毎年4月に如水会館で新入生歓迎会が開催されるが、その席上で親しくなった社会学部1年の日君からある提案を受けたことがある。彼が言うには、これだけ自然に恵まれた素晴らしいキャンパスなのに、ごみが散らばっていて見苦しいので仲間と時々清掃に当たっている。大学として組織的にごみ拾いをすべきだ、との提案であった。

願ってもない提案なので、早速部長会議でキャンパス・クリーン・デーを設けることを計り承認された。その狙いは、学内の各層つまり教職員や学生のボランティア活動による学内清掃であった。しかしながら7月に第1回を行ったが、教員は殆ど見当たらず、参加してくれた多くは中高年層の職員で、学生の参加は4〜5名と数えるほどしかいなかった。初回からこのように盛り上がりを欠く企画は長続きせず、そのうち立ち消えとなった。

**植樹会の活動** このような手詰まり状況を大きく変えてくれたのが、植樹会の存在でありその活動であった。植樹会は1973年に創設され、国立キャンパスの森を維持し育てるために、毎年何回かしかるべき樹木を植えることを目的としていた。

り組んでくれた田崎宣義名誉教授にも昔を思い出し、この場を借りるご尽力にお礼を述べたい。

私の心残りは、植樹会の作業にこれまで直接に参加する機会を逃してきたことだ。いま病を得てこの機会は永遠になくなった。ただ三石会（石ゼミOBの会）が寄付した貧者の一灯から、植樹会が植えてくれた私の大好きなハナミズキが、図書館の近くで毎年花を咲かせ、活動を見守っているのがせめてもの慰めである。

これまで国立の森は、松くい虫の発生により赤松が大量に立ち枯れる被害にも見舞われ、放置したままでも存続できるというものでは決してなかったのだ。植樹は極めて重要であり、諸先輩からの寄付もあり、毎年それなりに大きな役割を果たしていた。この活動を支えてきたのが植樹会であり、私も総会の折などに呼ばれ挨拶をしてきた。この植樹会が創立30周年を機に、2003年単なる植樹からキャンパスのごみや汚れを一掃すべく学内清掃に当り、その美化を活動に加えてくれることになった。いわば植樹から環境保全への活動の拡大である。単なる植樹に止まらず、国立の森全体の生態系まで考えた保全、そして学内美化のための清掃も加えていただき、長年悩まされてきたキャンパスの環境維持、保全問題は一挙に解決の方向に向かった。

もとより、私は植樹会のこの動きに大歓迎であった。「国立キャンパス緑地基本計画」も策定され、HPなどで見ると毎月の定例作業に参加者も増え特に学生の参加も100名を超えるようである。単に作業で汗を流すだけでなく、「山菜摘み」や「山菜てんぶらパーティー」も行われている。老若男女が世代の差を忘れ同窓生として交流している様子は、元学長としてうれしい限りである。

このような植樹会の活動を長年支えてくれた顧問の東京農工大名譽教授の福島司先生のご尽力に改めて感謝したい。また私の学長時代に副学長として、キャンパスの美化、環境保全に取